

郵便碁

盛岡市 古澤元雄

小学校の時に兄たちが打っているのを覗いていて覚えた囲碁は、それ以降わたしの趣味の中心になり、社会人になったころには初段まで上りましたが、それ以上にはどうしても進めませんでした。

そうしたある日、ふと見た囲碁誌に「郵便碁を始めてみませんか?」という記事を見ました。読んでみると面白そうです。碁盤の目が19x19の座標系になっていることを利用して、打った位置を数字で表してはがきに書き相手に送る、相手はそれを自分の碁盤(碁戸紙)に写し、それに対応する自分の着手をやはり数字で表して相手にはがきで送信するというもので、その間考える時間はいくらでもあるし参考書を見てもよいことから、棋力の向上に役立つというものでした。当時地方において夜の時間に余裕のあった私は、好奇心も手伝い「全国郵便碁愛好会」に早速申し込みました。昭和52年ごろの話です。

送られてきた会員名簿から、まずは東北から宮城、秋田、青森の3人、県外は和歌山県、兵庫県の方々に早速申し込み、対局を開始しました。

大抵3~4局同時に対局するのですが、1局一手ですからたった4行あれば良く、余白が充分あります。そこで、四季折々の話題などを短信として書いて送ります。すると向こうもいろいろな出来事などを書いてきます。全く会ったこともない方々との交信なので、最初は戸惑いもありましたが、慣れてくると親しみが感じられるものでした。こうした交信で感じたのは日本列島の縦に長いことです。例えば、2月ころ福岡の人から「今日大宰府の梅を見てきました」と書いてあるのに、同じ日に届いた札幌の方からは「今日もブリザードが吹き荒れています」とあるのです。日本列島は四季があってよいなーとあらためて感じたことでした。

郵便碁を始めて感じたのは時間がかかることでした。普段の直接対局は1時間もあれば終わるのですが、郵便碁はそうはいきません。はがきを出してから返事が来るまで早くても4~5日かかります。碁は普通200手まではいきますから、往復2手で一週間とすれば打ち終えるまで約2年、考えて長い碁になると2年半かかることがあります。当然ですがその間にちらにも相手にもいろいろな変化が起こります。ある対局のこと、始まってから1年一寸の頃、返信がなかなか来ないので可笑しいなと思っていたら、奥さまから手紙が来て、「主人は先週亡くなりましたので、この対局は終わりにしてください。」とありました。この方は人生と碁を同時に投了したわけでした。

またある時、たまたま対局している方の居る和歌山県へ出張することがあり、その旨例の短信で書いて送ったら、「ぜひうちへ泊まって碁を打ちましょう」と云うのです。それではとお邪魔して座敷へ通されて挨拶が終わり、お茶が出てくるものと待っていたら、最初に出てきたのはなんと碁盤!「さあやりましょう」とご主人です。夕食はビールにすき焼きでした。どちらも大好物の私、大いに張り切っていたら、宴だけなわなのに「さあそろそろ切り上げて打ちましょう」とご主人です。次の日の汽車の中で浮かんだのが次の一句「遠来の碁仇お茶より まず碁盤」でした。

色々なことのある郵便碁でしたが、関西棋院の岡部プロや長谷川プロとも対局出来たのも良い勉強でした。また、どうしても勝ちたい相手の時は、たった一手に三日もかけたことがあります。参考書も見ましたし、何回も碁盤に並べて研究もしてのことです。結局その碁は負けましたが、こうした努力と経験が生きて棋力は徐々に向上し、還暦の祝いに関西棋院から橋本宇太郎署名の六段免状をいただいたのは、わが人生で最もうれしい賞状になりました。

(原稿受付 2020.3.6)

本稿は、岩手日報(2019年5月28日)のコラム「ばん茶せん茶」に掲載された記事を転載しています。める碁会HPへの掲載にあたり、株式会社岩手日報社殿には、ここに記して謝意を表します。
